Osaka University Knowledge Archive

Title	ベルクソンにおける直観を構成するものとしての人格について
Author(s)	平光, 哲朗
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 13-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26540
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ベルクソンにおける直観を構成するものとしての人格について

平光哲朗

目次

序
1. 共感について――「形而上学入門」における直観の定義――
2. 人格とは何か――マドリッド講演「人格」における人格の定義――
3. 記憶を縮約する力――『物質と記憶』における意識の諸平面と性格――
4. エラン・ヴィタル――『創造的進化』における生命の直観――
結論

序

本稿はベルクソンにおける直観を問う。ベルクソンは直観を自己による自己自身の人格との共感として定義する。この点においてベルクソンの直観は心理学的である。しかしベルクソンは自己共感からあらゆる実在の探究へ進む。この点においてベルクソンの直観は形而上学的である。本稿はベルクソンの直観が形而上学的方法として成立する決定的な地点を求める。そのためにまずベルクソンにおける人格の意味を判明にする。次いで人格の成立について、縮約としての記憶とのかかわりを明らかにするために、『物質と記憶』の記憶理論を参照する。そのうえで『創造的進化』第 3 章におけるベルクソンの生命の直観を解釈する。ベルクソンはそこで人格への共感を導きの糸に、生命の実在との接触をはかっている。それを読み解くことで、最終的に、人格のなかに顕れるものとしてのエラン・ヴィタルの意味を明らかにする。

1．共感について――「形而上学入門」における直観の定義――

ベルクソンが実在を把握するための自らの哲学的方法を直観（intuition）として定めたのは、1903 年の論文「形而上学入門」においてである。そこで直観は共感として定義される。

> われわれはここで直観を共感（*sympathie*）と呼ぶ。われわれは共感によってひとつの対象の内部に自らを移し、その対象が持つ唯一なところ、したがって、表現不可能なところと一致する（1395）[1]。

続いて共感についてその内容が次のように語られる。

> われわれが単なる分析によってではなく、直観によってすべてを内側からつかむ実在が少なくともひとつある。それは時間をつらぬく流れにおけるわれわれ自身の人格である。それは持続するわれわれの自我である。われわれは他のどんなものとも知的に、あるいはむしろ精神的に共感することはできないが、われわれはわれわれ自身とは確かに共感する（1396）。

ベルクソンが直観を共感として定義したのはなぜか。「われわれはわれわれ自身とは確かに共感する」。しかし一般的に共感は、自己とは他なるものとの間に成立するある感覚や感情の一致を意味する。自分が自分自身に共感するというのはいささか奇妙である[2]。この自己共感ということによって、ベルクソンはどのようなことを考えているのか。

ベルクソンは直観の根底的な意味を「持続のなかで考える」ことにおく（1275）[3]。このことから「われわれ自身の人格」との共感について、ベルクソンが最初の著作で持続について述べていたことから考えれば、まず次の様に理解できる。

ベルクソンは 1889 年の第一主著『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』と略記）において、私たちの意識の実在が持続であることを明らかにする。そこでは持続の発見が自己を再び取り戻すこととしてくり返し語られる。「自我が自我自身に再びなる」（108）、「われわれがわれわれ自身を再びつかみ直す」（151）。この著作において持続は、私たちの意識の諸状態が自我の深層あるいは根底的自我において、質的な多様性、相互浸透、そして有機的組織化を呈することを実質的な内容とする。ただ私たちは通常自らの意識状態を量化、記号化しそれらを相互外在的な形式において空間的に扱っている。それゆえ持続を純粋なかたちで捉えるためには、自我の表層から深層へ、根底的自我へと立ち戻り、自己を再び取り戻さねばならない。こうして自己自身を再びつかみ直すことは、そのまま私たちの意識が自らの自我における「唯一なところ」、「表現不可能なところ」と一体化することである。「自由に行動すること、それは自己を再び取り戻すことであり、純粋持続に自らを置き直すことである」（151）。こうした『試論』の内容から思い返せば、直観が自己共感として定義されることについて、一定の理解が得られる。

しかしとりわけ「形而上学入門」において、ベルクソンが直観を哲学的方法として定義し、それを共感と定めたことには、さらなる理由がある。それはベルクソンがこの論文を提出する以前、

1　ベルクソンの主要著作の引用は生誕百年記念版著作集から行ない、その頁付けを本文中に記す。Henri Bergson: *Œuvres*, Paris, 1959.

2　同様の感慨を杉山直樹氏が記している。さらに共感が持続の複数性を前提することに言及している。杉山直樹『ベルクソン　聴診する経験論』創文社、2006 年、306 頁～ 307 頁。

3　Introduction II, *La pensée et le mouvant*.

1896 年の第二主著『物質と記憶』第 4 章において、私たちの意識の外に持続を認めるに至ったこととかかわる。そこでベルクソンは、外部知覚において物質の実在が私たちの意識に直接与えられていることを確かめている[4]。その実在は運動であり、ベルクソンはその動きの傾向を把握している[5]。そしてこの観点からベルクソンは持続の一元論を構想し、物質から精神にいたる諸存在のすべてを、持続の緊張の程度の多様性として理解している。持続は、私たちの意識に限られることなくそれ自体現実的に多様であり、複数の諸持続が認められる。「形而上学入門」というこの論文の表題の背景には、諸存在のすべてを持続として把握するベルクソンの形而上学的立場の確立がある。この成果を踏まえ、ベルクソンが読者を自らの形而上学の核心へ導くのがこの論文である。このように考えるなら、ベルクソンによる直観の定式化は、私たちの意識だけではなく意識にとって外的なものの実在が持続であることの、またそれへいたる方法を哲学的に一般化する可能性の、自覚的表現である。

ベルクソンが直観を共感として定義することは、持続の現実的な多様性（複数性）を認めるとともに、私たちの意識がそれらへ到達可能であることを新たに前提している。このことから考えれば、直観が自己共感とされたことは、自らと諸他の持続との一致を前提として、「われわれがわれわれ自身を再びつかみ直す」ことを改めて捉え直したことの表れとして理解できる[6]。「われわれが…、直観によってすべてを内側からつかむ実在が少なくともひとつある」。この「少なくともひとつある」というのは、持続を意識に外的なものの実在として認めているからこそである。

いま述べてきたことは、この論文の末尾に掲げられている実在探求の原理の命題化にも明白に表れている。

Ⅰ　――われわれの精神に外的ではあるが直接的に与えられる実在がある。

Ⅱ　――この実在は動きである。出来あがった事物があるのではなくただ出来つつある事物があるのみであり、維持される状態があるのではなくただ変わりつつある状態があるのみである。停止は見かけでしかなく、むしろ相対的である。われわれが永続的な流れにおけるわれわれ自身の人格について持つ意識は、われわれを実在の内部に導きいれ、それを基準としてわれわれは他のものを表象しなければならない。したがって、傾向を生まれかけの状態にある方向の変化と呼ぶことに同意するならば、あらゆる実在は傾向である。

4　ベルクソンは、感覚的性質の物理学的実質とされる莫大な数の諸震動を、その運動の動性において捉える。その動性は、外部知覚における私たちの身体的運動がその物質的極限において呈する弛緩した傾向のなかに把握される。

5　ベルクソンによる外部知覚における物質の実在把握については別のところで詳らかにした。平光哲朗『持続としてのイマージュ――ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について――』2008 年、大阪大学大学院文学研究科提出、博士論文、45 頁。

6　最近の研究では、David Lapoujade が直観と共感を別の操作として区別し、それらを補いあう関係において捉えることで、明快な解釈を提示している。David Lapoujade: Intuition et sympathie chez Bergson in, *Annales bergsoniennes III*, Paris, 2007, pp.429-447.　特に、p.442。彼は、私たち精神の内にある「非人間的な純粋平面」としての物質、生命、社会等を「他なるもの」と呼び、この言葉を差し挟むことで直観と共感とを順序付けて整理する。ただ「他性」（altélité）、「他なるもの」（l'autre）という言葉は、ベルクソンの哲学全体から検討する余地がある。

実在のうち、少なくともひとつは、私たちの共感によって把握される。それは私たちの人格である。この「自我自身による自我の持続の内的、絶対的認識」（1402-3）を導きの糸として、私たちが私たちの意識に外的な諸対象の持続を一つひとつ辿っていくこと、これがベルクソンによる実在の探求となる。

しかし、それでも疑問が残る。そこに心理学的な共感以上の何かがあるのか。自己自身の人格への共感を基準として意識に外的な対象の実在を探求することは、この哲学が心理学的な水準にとどまることを意味するのではないか。つまり、ベルクソンの直観は哲学的方法たりうるのか。ベルクソンの議論は、往々にして、心理学的内容がそのまま形而上学的水準の議論へと、それと気づかれることのないまま移行する。それが読者を持続のなかへ移行させる手法であるとしても、ここでベルクソンが共感を形而上学への導きの糸とする以上、その肝心な点はどこにあるのか。

私は、ベルクソンの直観が形而上学の方法であることは、上記引用の末尾で、「したがって」と続けられている箇所にかかっていると考える。その手前でベルクソンが述べているのは、自らの人格と共感することで、私たちは実在を把握し、同じように諸他の対象へと共感を拡げなければならない、ということである。そしてベルクソンは、「したがって」、「あらゆる実在は傾向である」と述べる。唐突な印象があり、前後のつながりには一見飛躍があるように思われる。意識に外的な対象の実在が動きであることと、その実在へ私たちは自らの人格への共感を入り口としてはいっていくこと、この語られている二つの内容から、実在が傾向であることが帰結される。そのあいだには、ベルクソンの哲学を成立させるもっとも形而上学的な連結線があるように思われる。この隠れた連結線の内実を考察することによって、ベルクソンの哲学における直観が形而上学を成立させる決定的な地点を明らかにしたい。

私は、「われわれ自身の人格」をひとつの運動として成立させている、縮約としての記憶という力の傾向を、自己共感のなかで把握することがベルクソンの直観であると考える。この考えを続く節のなかで明らかにする。

２．人格とは何か――マドリッド講演「人格」における人格の定義――

ベルクソンは「人格」ということの意味を、1916 年のマドリッド講演「人格」で判明に語っている[7]。そこでベルクソンは、人格をめぐる形而上学的問題と心理学的問題をとりあげ、持続としての人格という自らの立場からそれぞれの問題を論じている。形而上学的問題は、人格はいかにして一なるものであるのか、というものであり、心理学的問題は、人格の断絶、分裂が例外的な諸状態において引き起こされることの意味を問うものである。ここでは特に、ベルクソンによる心理学的問題へのアプローチを取り上げたい。その議論のなかで、ベルクソンが動物と人間の違いを人格の有無に認め、人格ということの意味を明確な仕方で説明しているからである。

ベルクソンにとって意識は「内的生の不可分な流れ」である。人格の分裂、二重化という事例は、この流れが「堰き止められ」、流れの連続性が断片に分裂する経験としてまずは理解される。

7　Henri Bergson: *Mélanges*, Paris, 1972. pp.1215-1235.　以下 Mélanges の引用は M. と略記し、続けてその頁付けを本文中に記す。

ベルクソンはこの経験について、「内的生」が持つ「特別な性格」から考察し、人格の分裂という問題を解釈する。ベルクソンはこの解釈を人間が一個の人格であることの「努力」と「疲れ」に着目することによって行う。この解釈を展開するなかで、ベルクソンは動物と人間を対比して、私たちが人格を維持するということの意味を説明する。その説明には、ベルクソンが特に「人格」という言葉を用いるとき、それが「意識」や「内的生」、「自我」とどう違うのかということを読み取ることができる。

> 人格が人間に固有であることに注意しよう。ただ人間のみが人格である。人間だけがその意識的で内的な生において、不可分の連続性を構成する（M.1224）。

ベルクソンは、「われわれは動物の意識の生の内側に侵入することはできない」と述べ、仮説に留まると前置きしながら、動物における意識の生を認め、それと人間における意識の生との違いを述べる。動物も自己自身の意識はあるだろうし、一定の記憶を持つだろう。しかし動物はその意識の生のなかで、「その生涯の始まりから終わりまでの連続性の感情」を持たないだろうとベルクソンは推定する。

> しかし最も知性的な動物であっても、犬、猿、象であっても、その運動において、ある点から他の点まで、止まることなく進む矢の運動にも似た内的な生を繰り広げることはない、と私は想像する。動物は、始まりから終わりまで、いくつもの停止が差し挟まる一連のいくつかの運動を通過するのではないだろうか。高等動物は人格を持とうと欲するだろう。そして人格を獲得しようと努める。しかし、内的生のこの流れを中断なく通すためには、鋼のばね（un ressort d'acier）を恒常的に圧縮されたたまま保たなければならない。動物は、それに達する力を十分持たないに違いない。ばねはただちに緩む。対して人間は、圧縮されたばねを保つに至り、人間の意識の生の流れは、断片に分裂することなく連続して通過する。このことは努力を要求する。それは疲弊させる努力を表している。ひとつの人格であることは疲れることなのだ、直立し、二足歩行することがとても疲れるように（M.1225）。（強調は筆者による）

動物も、動物の仕方で意識を持ち、その内的生の流れを生きている。つまり動物もある持続を生きる。しかしその程度において人間とは区別される。動物の意識の生の流れは、その生の初めからその意識が生きる現在という終端までを、ひとつの全体的運動として構成しない。動物は、その内的生の流れの一定程度の持続は持つが、そこにはいたるところで停止が挟まり、寸断された諸断片が継起する持続を生きる。人格がそこに形成されることはない。動物が人格を持つためには、内的生をその生涯の初めから終わりまで通す「鋼のばね」を「圧縮されたまま」保持しなければならない。対して人間は人格を持つ。

私たちの意識の生はひとつの流れであり、ひとつの流れの連続性を持つ。それは生誕に始まりもはや決して止まることがない。この運動がある限定された持続を占めるにしても、それはひとつの分割不可能な運動である（M.1223）。

人間も人間の仕方である限定された持続を生きる。しかしその意識の持続は、その内的生の初めからその意識にとっての終端である現在にいたるまで、ひとつの不可分な運動である。これが人格を持つということである。ここで注目したいのは、ベルクソンがこうした人格を構成する要件として、「鋼のばねを恒常的に圧縮されたまま保たなければならない」、と述べていることである。

この「鋼のばね」を「圧縮されたまま」保ち続けるという比喩の実質は何か。私はそれを「縮約としての記憶」と考える。ベルクソンは、人間がこの圧縮されたばねを保ち続けるには「努力」を要し、それはとても疲れる努力なのだと述べている。しかし通常の場合、私たちはこの力を自らの意志的努力として感じることはない。上記の引用した箇所のあと、ベルクソンはこの努力の疲れが、人格の分裂、二重化として現れると解釈していく[8]。このベルクソンによる心理学的問題の解釈には、ベルクソンの記憶論の最も形而上学的な概念が根本にある。縮約という記憶の力が、私たちの過去の状態を意識の現在へと凝縮させているのであり、「鋼のばね」を圧縮されたまま保ち続けることを、つまり私たちの人格を構成することを可能にしている。次の節で『物質と記憶』における記憶理論を参照し、この理解を確かめたい。

３．記憶を縮約する力――『物質と記憶』における意識の諸平面と性格――

縮約という記憶の概念について、ベルクソンによるこの概念の理解とその体系的な位置づけは、外部知覚の問題系に示されている。『物質と記憶』第 1 章と、特に第 4 章においてである。しかし、縮約は記憶の概念であるのだが、同書第 2 章、第 3 章の記憶理論のなかで、ベルクソン自身によっては明示的に言及されない。ドゥルーズが独自にこの概念の働きを洞察している。ただそれも示唆的に指示されるに留まる。ここではドゥルーズの読解に準拠しながら、この概念について、特に縮約としての記憶と性格の成立とのかかわりに注目して取り上げたい。

ドゥルーズは、ベルクソン自身による記憶の二形式の区別とは別に、ベルクソンの記憶概念に二つの相を区別している[9]。「記憶としての記憶」（mémoire-souvenir）と「縮約としての記憶」（mémoire-contraction）である。ドゥルーズの理解をごく簡単にまとめれば次のようになる。縮約としての記憶によってすべての記憶が潜在的に反復されることで、記憶は全体として絶えず自己共存する。縮約としての記憶は記憶が自己反復する力であり、この「潜在的反復」により差異が生みだされる。ドゥルーズは持続を「自己において異なるもの」と定義する[10]。ドゥルーズはこの自己差異化の起源として、縮約としての記憶という「形而上学的記憶」の働きがあるとする。

8　ベルクソンは人格の分裂、二重化を決して認めない。「人格は絶対的に不可分である」（M.1230）。

9　Gilles Deleuze: La conception de la différence chez Bergson in, *Les études bergsoniennes vol. IV*, Paris, 1956, pp.77-112. 特に、pp.104-105。優れた英訳を参考にした。Bergson's conception of difference, translated by Melissa Mcmahon in, *The new bergson*, Manchester University Press, 1999, pp.42-65.

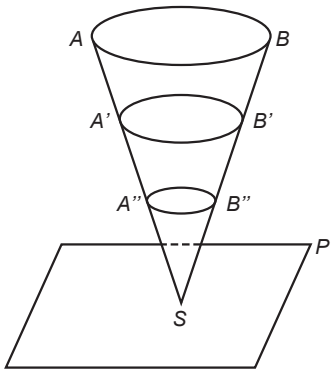
10　Ibidem, p.88.

ドゥルーズはこの記憶の力が働いていることを、『物質と記憶』第 2 章における注意的再認の議論と、第 3 章に描かれる倒立円錐による行動、知覚、記憶の全体像の図式化とにもとづいて指示する。その内容を、ドゥルーズが論拠として挙げている箇所を引きながら手短に確認することで、「縮約としての記憶」という概念の内実を確かめたい。

まず注意的再認の議論を参照する。ベルクソンは注意的な再認を回路の形成として考える。再認の注意が強まるにつれて対象の知覚の判明化が為される。この判明化は、対象とその知覚、そして記憶が一体となり、そのつど回路を形成することで進展する。ベルクソンは注意的再認における認識の判明化は、その回路に参与する記憶がより広範に渡るにつれて進むと考える[11]。そしてこの回路には、それが作りなおされるごとに記憶の全体が参与するという。

> したがって同じ心理的生が記憶の相継ぐ諸相で無際限に反復されるだろうし、精神の同じ行為が様々に異なった高さで演ぜられるだろう（250-251）。（強調は筆者による）

ドゥルーズは、ベルクソンが述べるこの「同じ心理的生」の反復を、過去全体を縮約する記憶の力によるものと解釈する。次いでドゥルーズが指示するもうひとつの箇所を参照する。ベルクソンは平面に円錐が逆立ちして頂点を接している図を示し、行動と知覚、そして記憶との連関の全体を図式化している。



> 結局のところ、点 S であらわされる感覚―運動機構と AB に配置される諸記憶の全体とのあいだには前章であらかじめ示唆しておいたように、われわれの心理的生の無数の反復のための余地があり、そのいずれも同じ円錐の A'B'、A''B'' 等々の断面で表わされる、ということになる（302）。（強調は筆者による）

---

[11] 記憶は、「示唆された諸事象を――あるときには対象そのものの細部を、あるときには同時に生起して対象の解明に貢献できる細部を――ますます多く対象へと反射する」（250）。それによりある対象の細部がいっそう豊かに与えられ、その輪郭が際立っていく。

底面 AB によって示されるのは記憶がもっとも弛緩した夢の平面であり、頂点 S によって示されるのは記憶が知覚に重なり物質化する場所としての感覚―運動機構、つまり身体である。これがベルクソンによって描かれる行動―知覚―記憶の全体像であり、この円錐に可能的断面として描かれる A'B'、A"B" と頂点 S とが形成する倒立円錐は、われわれの心理的生が反復されるそのたびごとの記憶の全体を示す。こうした相継ぐ記憶の諸相において、同じ諸記憶が反復されることで、そのつどの精神の緊張の程度が決定される。ドゥルーズはこの潜在的な反復の力として縮約という記憶の働きを指示する。そして彼はこの理解をもとにベルクソンの記憶論を潜在的なものの存在論として解釈する。

私はここで縮約としての記憶と行動における性格とのかかわりに着目したい。『物質と記憶』においてベルクソンは「意識の諸平面」という概念を提出している。その存立もまた、上記のように理解した縮約としての記憶から考えることができる。そしてそれにより、行動における性格の現れと縮約としての記憶とのかかわりを考えることができる。そのうえでベルクソンにおける人格と縮約としての記憶とのかかわりを明らかにしたい。

さて、身体的行動の現在に向けて精神がそのつど定位する記憶の総体は、縮約としての記憶による純粋記憶の反復によって存立する。上の引用における図式のなかで A'B' ないし A"B" として示される諸断面は、ベルクソンが「意識の諸平面」と呼ぶものと重なる。意識の諸平面についてベルクソンは次のように述べる。

> これらの平面ははじめから出来あがったものとして、相互に併置されるものとして与えられているのではない。これらの平面はむしろ潜在的に存在する。こうした存在は精神に固有なものである（371）。

意識の諸平面は、精神にとって固定的なものではなく、すでに出来あがった、不変な実体ではない。それらは記憶の全体が反復されるそのたびごとに変化し続ける。意識の諸平面を構成する素材としての記憶は、それが「同じ心理的生」ではあっても、反復されるたびに、記憶の総体のなかで新たな相互浸透を得る。同じ記憶もかつてと異なる記憶の布置のなかでその意味を変える。意識の諸平面は絶えることなく変化を続ける「出来つつあるもの」であり、それは身体的行動の現在に潜在的に対峙している。こうした意識の諸平面の存立は、さらに行動における性格の現れとして理解することができる。ベルクソンは「性格」（caractère）について次のように語っている。

> われわれの決断すべてにいつも現れるわれわれの性格は、まさしくわれわれの過去の状態すべての現実的総合であることが分かるだろう。こうして凝縮された形態（forme condensée）のもとで、先立つわれわれの心理的生は、われわれにとって外的世界にもまして存在している（287）。

性格は私たちの行動や思考の独特の屈曲を表すものである。それは、ある選択やある決断を前

にした私たちの感情、思考、判断、欲求、意志の揺れ動きのなかにくり返し現れる傾向として際立つ。ベルクソンは、決断における性格の現れが「われわれの過去の状態すべての現実的総合」であり、その「凝縮された形態」であるという。この凝縮を可能にするものが記憶を縮約する力であると考えることができる。縮約としての記憶によって、純粋記憶としてそのすべてが保存されている「先立つわれわれの心理的生」は「性格」のなかに潜在的に凝縮される。

> われわれの過去の心理的生は、全体として、われわれの現在の状態を、必然的には決定することなく、条件づける。過去の状態はひとつとして性格の内に明白には現れないが、過去の心理的生はわれわれの性格の内にもまた、やはり全的に顕現する（289）。

性格のなかに過去の状態が判明な仕方で現れることはない。それは「凝縮された形態」のもとにある。過去の諸状態は凝縮され、緊密に相互浸透し、有機的に組織化され、全体としてひとつの流れを形成する。つまりひとつの持続になる。

こうした『物質と記憶』の記憶理論から人格という概念をあらためて考察すれば、それは純粋記憶のなかで潜在的にはたらく縮約としての記憶によって成立するものと考えることができる。

４．エラン・ヴィタル――『創造的進化』における生命の直観――

ベルクソンにおける直観は、持続が意識の外部に認められるとともに、共感として定義される。私たちは自己自身の人格への共感を入り口として実在のなかに入る。人格は、意識の生の、そのはじまりから現在という先端までの記憶の凝縮である。この凝縮されたものとしての人格と共感するということは、実際どのように果たされるのか。それは例えば、ベルクソンが『試論』からすでに述べているように、私たちの意識の深いところで進む熟慮や決断において、私たちが自分自身に立ち返り、問題のなかで何かを生み出そうとするとき、その集中のなかで自らに固有な持続に自らを再び置き直すということである。この努力のなかで自らの来歴のすべてが集約されることで、私たちは高度な自由を体現する瞬間を持ちうる。

しかし共感が、こうした心理学的な水準にとどまらず、形而上学的方法としての直観であるためには、つまり自己との共感が実在を探求する入り口であるためには、もう一歩を踏み出す必要がある。私はそれを、人格へと自らの過去を凝縮させているその動きを把握することと考える。ベルクソンは、自らの人格を人格として成立させている運動の、動きの傾向を把握することにより実在を理解している。その動きが記憶の縮約である。

ベルクソンは「形而上学入門」のなかで、持続として把握された実在全体の階層に、二つの方向を認めている。一方は持続が弛緩する傾向を辿る。その極限には物質が見出される。ベルクソンは『物質と記憶』第 4 章で持続の弛緩した運動として、物質の実在を直接的に把握している。そしてもう一方は持続が緊張する傾向を辿る。この精神の傾向の極限に生命の原理が見出される。しかしベルクソンは「形而上学入門」あるいはそれ以前の著作のなかで、実在のこの方向の極限における直観を示していない。この直観を詳らかにするのが 1907 年の第三主著『創造的進化』（以

下『進化』と略記）第 3 章である。ベルクソンはそこで、自分自身の人格への共感を入り口として実在のなかに入り、生命の原理を動きの傾向において把握しようと試みている[12]。

ここでこれまで行ってきた人格についての解釈をもとに、ベルクソンの直観が生命の実在へといたる道を、そこで人格がどのように理解されているかを確かめつつ、辿り直したい。

まず確かめておかなければならないのは、この著作において人格の概念がその内容を新たにしていることである。それは人格の概念が過去の縮約にとどまらず、縮約による絶対的な新しさの湧出において語られること、そして人格の概念の核心に「意志」（volonté）が見いだされることである。これらの新たな着想は、ベルクソンがこの著作第 1 章冒頭で存在一般の意味を問い、性格ないし人格とその持続について説明するなかで示される。

> 結局、われわれとは何か、われわれの性格とは何か。それはわれわれの誕生以来生きてきた歴史の凝縮以外の何ものでもない。われわれは出生前の性向を持っているのだから、それはわれわれの生誕以前の歴史の凝縮ですらある。確かに、われわれはわれわれの過去の小部分をもってしか思考しない。だが、われわれが欲求し、意志し、行動するのは、われわれの魂の原初の屈曲を含む、過去のすべてでもってである。したがって、表象になるのはそのわずかな部分のみであるとはいえ、われわれの過去は、その推力によって、また傾向という形のもとで、われわれに全的に顕現する。
>
> こうした過去の残存から、意識にとって、同じ状態を二度通ることは不可能になる。取り巻く諸状況がいかに同じであっても、それらの状況がはたらきかけるのは、もはや同じ人格ではない。というのもそれらの状況は、その同じ人格を、その歴史のある新たな瞬間において捉えるからである。われわれの人格は、各瞬間ごとに経験を蓄積し築かれるものであり、絶えず変化する。変化することで、人格は、ある状態が、表面においてはそれ自身と同一であったとしても、深みにおいてくり返すことを断じて妨げる。だからわれわれの持続は不可逆なのだ。われわれは、われわれの持続のひとかけらも生き直すことはできないだろう。そのためには、その後続いて起こったことすべての記憶を消すことから始めなければならないからだ。厳密には、われわれはこの記憶をわれわれの知性から消すことはできるだろうが、われわれの意志から消すことはできないだろう。
>
> こうしてわれわれの人格は絶えず伸び、大きくなり、成熟する。人格の各瞬間はそれぞれ、以前あったものにつけ加わる新しいものである。さらに言えば、ただ新しいだけではなく、予見不可能なものである（498-499）。

ここでベルクソンが述べている性格ないし人格ということの概念的な枠組みは、これまで見た通りである。ただその内容に変化がある。まず私たちの出生前の歴史にまで「過去の内的生」は拡張される。そして「過去の内的生」の凝縮が意志に強く認められる。記憶は、知性からは消せ

---

[12] ベルクソンによる生命の直観だけを取り出しても、その生命の哲学全体を説明することにはならない。ただこの直観なくしてはこの哲学は実在との接触を欠くことになる。

ても意志から消すことはできない、とベルクソンは強調する[13]。

そしてこの引用の決定的な点は、ベルクソンが、ある人格へと凝縮された内的歴史が性格のなかに傾向として顕現することを語るとともに、持続の不可逆性に言及することにある。私たちは私たちの生に後戻りがないことを知っている。ベルクソンはこの経験的事実を、過去が人格において残存することの帰結として述べる。これはどういうことか。私たちの過去の内的生は、縮約としての記憶によって凝縮されることで、意識の平面として存立している。この意識の平面は身体的な現在を介して行動の平面に潜在的に対峙する。それにより私たちの行動は、もはやたんに必然的に決定されるのではないというに留まらず、程度の差はあるにしても、原理的に予見不可能なものとなる。ベルクソンは人格の各瞬間の新しさを、それらの予見不可能性として特徴づける。

こうした人格における新しさ、その予見不可能性を、ベルクソンは「絶対的」であるという。この新しさの絶対性はどのような理由から言われるのか。それは、ひとつには人格が独創的（original）であることに求められる。人格が私たち一人ひとりの過去の内的生の凝縮であるならば、原理的には、あらゆる人格はすべて異なり、そのすべてが唯一（unique）である。

しかし新しさが絶対的であることの本質的理由は、持続それ自体の予見不可能性にある。ベルクソンは、この後見るように、縮約としての記憶によって過去が不可分なまま現在にもたらされることで、現在が創造される、と考える。ベルクソンの哲学において意識の諸状態の不可分性は、それらの相互浸透性を意味する。私たちの人格として凝縮された過去は、記憶のたんなる総計ではない。記憶は縮約のなかで緊密に相互浸透し、不可分な全体を構成する。この過去の凝縮とともに生みだされる現在の新しさは、その出自的要素である私たちの過去の内的生の諸状態一つひとつに分解し、またその分解した要素的諸状態から再構成しようとしても、決して再現されない。つまり予見を可能にする手続きをあてはめることはできない。ベルクソンはこの予見不可能性を、さらに過去と「共約不可能」なものと述べる。

> 意識では過去が現在に押し迫り、来歴からは共約不可能な新しい形態をそこから湧出させる（517）。

縮約された過去と新しい現在とは共約不可能であり、そのあいだには非連続性が認められる[14]。ベルクソンが『進化』において持続に認めるのはこの非連続性であり、過去の内的生と現在とのある種の断絶である。これが新しさの絶対性の意味である。しかし、それでもなおこの断絶は、記憶の縮約とともに内的に生み出されるものである。こうして持続は、人格において自己

---

[13] ベルクソンは人格の核心を意志に見出し、自らの個体的な意志を手掛かりに、生命の原理へと遡る。「われわれがわれわれの存在を自らの意志のなかに置き直し、意志それ自身を、意志が引き継ぐ衝動のなかに置き直すとき、われわれは実在が永続的な増大であり、果てしなく続く創造であることを感じ、理解する」（698）。

[14] ベルクソンは『道徳と宗教の二源泉』において、『進化』のなかで述べていた「予見不可能性」を「非連続的跳躍」（sauts discontinus）によるものと捉えている。この言葉は持続の概念を非連続の連続として理解させる。「本質的なことについては、われわれはまだ暗に述べたに過ぎなかった。つまり生命がその進化に沿って、非連続的跳躍により細部に至るまで創造する諸形態の予見不可能性についてである」（1072）。

が絶えず生まれ変わることとして理解される。

このように『進化』における人格の概念の内容を踏まえたうえで、ベルクソンによる生命の直観を辿り直したい。それは同時に縮約と湧出（jaillissement）という運動について考えることである。ベルクソンは『進化』第 3 章でこの哲学者自身の人格との共感を入り口に生命の実在との接触を描いている。そこではこれまで明示的に語られなかった縮約という記憶の働きが、ベルクソン自身によって自覚的に語られる。それとともに過去の縮約による現在の創造が言及される。ベルクソンは自己による自己の共感から出発して「自己による自己の創造」として生命の実在を理解している。

> そこでわれわれが持つもののうち、外的なものからより遠ざかっていると同時にいっそう知性の浸透していないものに集中しよう。われわれ自身の最も深いところを、われわれがわれわれ自身の生の最も内奥と感じる点を探そう。するとわれわれは純粋持続のなかに、過去が、つねに進行中にあり、絶対的に新しい現在によって絶えず増大するひとつの持続に再び潜る。けれどもそれと同時に、われわれは自らの意志のばね（le ressort de notre volonté）が、その極限まで緊張するのを感じる。われわれは、われわれの人格それ自身の激しい縮約によって、姿を消しているわれわれの過去を集め、緊密にして不可分なままに、それを現在のなかへ押し入れなければならない。過去は現在に入り込むことで、現在を創造するだろう。われわれがわれわれ自身をこうしたところまで掴み直す諸瞬間は極めて稀である。われわれの持続の感情は、われわれの自我と自我自身の一致を言うのだが、程度を容れる。しかし、持続の感情が深まり、一致が完全になるにつれて、それらがわれわれの身を置き直すところである生命は、知性を吸収しそれを超えていく（665）。（強調は筆者による）

ここにベルクソンの哲学における生命の直観があり、人格への共感によって、実在をその動きにおいて把握しようとする「反省の努力」がある。ベルクソンは純粋持続に自らを置き直す。それは、記憶の縮約が新たな現在を生みだし、同時にその現在が記憶に保存されることで、人格が生まれ変わり続けるひとつの持続である。続く箇所でベルクソンは縮約としての記憶の働きにはっきりと言及するのだが、その手前でこう述べる。「それと同時に、われわれは自らの意志のばねが、その極限まで緊張するのを感じる」。見てきたように、ばねの比喩の実質が縮約にあるならば、ベルクソンはここで記憶を縮約する力を「意志」と見なしているということである[15]。

ベルクソンはここで何をしているのか。それは自己による自己自身の人格との共感である。しかしその共感は、ただ自己を取り戻すことで果たされてはいない。共感は人格が現在を創造するにいたるまで続く。自己による自己の共感が「自己による自己の創造」になる。この共感のなかでベルクソンは何を掴んでいるのか。ベルクソンは、現在の創造が「われわれの人格それ自身の激しい縮約」による、と述べる。この縮約の「激しさ」に、ベルクソンが自らの人格を超えて、

15　この意志は私たちの個別的な行為のなかではたらく意志だろうか。ベルクソンの記述は両義的であり、心理学的でありつつそれを超えている。前註の引用箇所を参照。

それを人格として凝縮させている力の起源へ、生命という実在の極限へ到ろうとする努力がかいま見える。それは、「姿を消しているわれわれの過去」、すなわち潜在的な純粋記憶のなかで、記憶の全体を縮約し過去を現在へと自己共存させているそれ自体潜在的な力を把握しようとする努力である。

イッポリットはベルクソンの直観を「創造を創造として反省すること」と規定し、次のように述べる。「エランを中断することなく、創造を創造として反省することができるような苦しく希有な努力でもしない限りは、観照すると同時に行為することはできない。この努力こそ直観である」[16]。このイッポリットの解釈は、私には、ここでベルクソンが展開している努力、自らの人格を存立させている「潜在的な反復」、「形而上学的記憶」の力を把握しつつ、同時に絶対的な新しさの湧出を見届けようとする努力であると思われる。ベルクソンの直観はまず自己の人格への共感である。しかしここで共感は、人格を人格として存立させている運動を、その傾向において把握しようとする努力に至る[17]。この点においてベルクソンの直観は形而上学的である。

ベルクソンは、自らの人格を人格たらしめる記憶の縮約という動きを辿りつつ、何かが生まれつつある湧出の動きを捉える。過去の縮約によって新しい現在が生まれつつある。その新しさは、過去の縮約によるものでありながら、しかし過去とは共約不可能な、そこからは予見不可能な何かである。厳密にいって、湧出それ自体は新たな現在の出現とは異なる。新たな現在の創造は、現実的な行動において、意識が物質的世界に現れ出ることによって果される。ベルクソンが湧出というのは、過去の縮約のなかで過去とは共約不可能な何かが潜在的に生まれはじめる、その運動の傾向のことである。「形而上学入門」のなかで、ベルクソンは実在は傾向であると述べ、それとともに次のように傾向ということを規定していた。「生まれかけの状態にある方向の変化」。湧出は、過去の縮約とともに、私たちの人格が生まれ変わるはじまりの動きである。そして、この縮約とともにはじまる湧出という運動の傾向が、エラン・ヴィタルと呼ばれる。

エラン・ヴィタルは、個体的には私たちの人格における意志として現れるが、それはひとつの意志へと過去の内的生のすべてを凝縮させ、新しい現在を創造する起源としての力である。ベルクソンは、縮約と湧出とが重なりあう動きに、私たちが生きていることの起源を見出している。

結論

以上、自己による自己自身の人格との共感として定義されたベルクソンの直観を、そこで共感されている人格の内実と形式から解釈してきた。ベルクソンの直観はそれが人格への共感である

---

[16] Jean Hyppolite: Aspects divers de la mémoire chez Bergson in, *Figures de la pensée philosophique*, Paris, 1971, p.487.　邦訳「ベルクソンにおける記憶の諸相」廣瀬浩司訳、『現代思想九月臨時増刊ベルクソン』所収、青土社、1994 年、231 頁。

[17] Lapoujade も同様の見解を示している。「まず直観は、人間を構成する非人間的な諸傾向を、人間の根底に探しにいかなければならなかった。それはそもそもなぜ直観が長く苦しい仕事を要求するのかということである。人間的経験の極限へ自らを置かなければならない…」。David Lapoujade: ibidem, p.438.　彼はこの引用した箇所に註を付し、「人格でさえ、持続のなかで考えれば、人間的ではない」と述べる。私は、「非人間的な諸傾向」をここで具体的に、人格を構成するものとしての縮約という記憶の力として考えている。彼が言うように、人格を構成する記憶の力は、それ自体としては「人間的」ではない。

かぎり心理学的であるが、それは同時に形而上学的である。ベルクソンはその共感のなかで、人格を潜在的に存立させる縮約としての記憶を、動きにおいて把握している。ベルクソンは実在が動きであり傾向であると言う。そうである以上、ベルクソンの哲学における直観を理解するためには、ベルクソンが実在を動きとして把握する過程をそのまま辿り直さなければならない。そのためには、ベルクソンの心理学的記述のなかに潜む形而上学との連結線を読み解く必要があった。本稿はその連結線を縮約としての記憶に求めた。そしてこの解釈を手がかりに、エラン・ヴィタルの私たちの人格への顕れを、運動の傾向において理解した。人格への心理学的共感から運動の形而上学へ。ここにベルクソンの哲学の歩みがある。

（ひらみつてつろう　神戸学院大学）

Sur la personnlalité qui compose l'intuition chez Bergson

Tetsurou HIRAMITSU

Cet article a pour objet d'éclaircir l'intuition chez Bergson. L'intuition se définit comme la sympathie avec notre propre personne par nous-même. Cette définition limite l'intuition bergsonienne dans le domaine de la psychologie. Cependant de la sympathie avec soi-même, Bergson se dirige ver le contact avec la réalité qui est la mobilité. Sur ce point, elle est la méthode métaphysique. J'essaie d'éclairer le point décisif où la sympathie psychologique devient la méthaphysique du mouvement.

Il faut d'abord éclaircir le sens de la personnalité bergsonienne. Ensuite, on voit la théorie de la mémoire dans *Matière et mémoire* afin de comprendre la constitution de la personnalité en fonction de la mémoire-contraction. Et enfin, je considère l'intuition du vital dans le troisième chapitre de *L'évolution créatrice*. Bergson tente ici de se diriger vers le contact avec la réalité du vital en sympathisant avec soi-même. Je l'interprète du point de vue de la mémoire-contraction qui condense l'histoire de la vie interne en une personne. Bergson saisit la mobilité de la vie dans la contraction du passé. Et du même coup, il saisit celle du jaillisement d'imprévisible nouvauté. Ce qui compose l'élan vital, c'est ce double mouvement.

L'intuition métaphysique bergsonienne consiste à suivre le mouvement de la contraction virtuelle dans une sympathie avec soi-même. C'est le passage de la sympathie psychologique à la métaphysique du mouvement.

「キーワード」
人格、直観、共感、縮約としての記憶、エラン・ヴィタル